

幼保小連携・接続の推進に関する一考察

－「白老町幼保小連携・接続プラン」を通して－

A study on promoting cooperation and connection
between kindergartens, nursery schools, and elementary schools
－Through the Shiraoi Town Kindergartens, Nursery Schools and
Elementary Schools Cooperation/Connection Plan－

二 宮 孝 行* 西 出 勉**
NINOMIYA Takayuki NISHIDE Tsutomu

I はじめに

今日、国の教育動向から幼保小連携・接続^(注)の取組が強く求められおり、古くは倉橋惣三による「幼稚園から小学校へ：幼稚園と小学校幼年級の眞の聯結」(大正12年)⁽¹⁾に始まり、平成22年11月には文部科学省の調査研究協力者会議より「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」⁽²⁾が報告されている。さらに、平成29年には幼稚園教育要領⁽³⁾等が改正され、幼児期の教育において「育みたい資質・能力や幼児期の終わりまで育ってほしい姿」が明確に示されるなど、これまで以上に小学校教育との円滑な接続が求められている。一方、小学校学習指導要領(平成29年告示)⁽⁴⁾では、幼児期の教育との接続及び小学校低学年における教育全体の充実を意図した学校段階等間の接続が新たに打ち出され、生活科を中心としたスタートカリキュラムの編成や合科的・関連的な指導の工夫など、教育活動の改善・充実が求められている。

令和4年8月には、中央教育審議会に「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置され、幼児教育の質の向上と幼保小(幼稚園・保育園・小学校)の円滑な接続をさらに深めていくことをねらって「幼保小の架け橋プログラム」⁽⁵⁾が推進されているところである。

このような中、白老町では昭和56年から幼保小連携の取組が自治体として継続的に取り組まれており、コロナ禍を経た令和4年3月には「白老町幼保小連携・接続プラン」⁽⁶⁾(以下、「プラン」と記述する。)を策定し、新たな連携・接続の取組をスタートしている。

本研究では、カリキュラム開発や継続的な取組が課題である幼保小連携・接続の推進について、白老町(白老町教育委員会)のプランを通して、教育委員会による幼保小に対する支援等がどのように行われているのかを整理し、その意義や実践内容等について述べていくこととする。

*北翔大学教育文化学部教育学科 **元北翔大学教育文化学部教育学科

Ⅱ 研究目的・内容・方法

1. 研究目的

白老町教育委員会における「白老町幼保小連携・接続プラン」を通して、プランの特色を整理するとともに、教育委員会等における連携・接続の推進に向けた幼保小への支援や役割等について明らかにする。

2. 研究内容・方法

(1) 白老町における「幼保小連携・接続」の取組の経緯等について整理する。

(2) 「白老町幼保小連携・接続プラン」の特色について明らかにする。

□ 白老町においては、教育委員会及び「幼児学童教育連絡協議会」（事務局：虎杖小学校）が中心となって、幼保小連携・接続に関する取組が進められてきている。

本研究では、以下の方法で情報収集等を行った。

<調査方法> ① 聞き取り調査（電話及びメール） ② 関係資料の収集

<対象者> 白老町立虎杖小学校 校長 関東 英政 教頭 寺沢 圭司

白老町教育委員会 担当者

Ⅲ 白老町における「幼保小連携・接続」の取組について

本稿では、白老町の「幼保小連携・接続」における取組の経緯や実践的な課題等について述べる。また、連携・接続に関する取組については、教育委員会が中心となって、町内の幼保小から構成されている「幼児学童教育連絡協議会」が具体的な活動を展開している。

以下、「幼保小連携・接続」に関する白老町の取組等について、述べていく。

1. 「幼保小連携・接続」に関する取組の経緯について

「白老町幼保小連携・接続プラン」については、幼保小連携・接続に関する国の動向や白老町における現状と課題を踏まえ、以下のような経緯を経て作成されたものである。

(1) 国の動向について

幼保小連携・接続については、平成22年11月に文部科学省「小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」が報告され、幼児期の教育から小学校教育への接続の重要性が提起された。また、平成28年12月には中央教育審議会（以下、「中教審」と記述する）による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」が示され、学校教育を通して子どもたちに育てたい姿と「生きる力」の理念を具体化し、幼稚園から高等学校まで育成したい資質・能力を体系的に育むことが求

められるようになった。その後、さらに幼稚園教育要領や小・中・高等学校・特別支援学校等の学習指導要領が改正され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁽⁷⁾や「育みたい資質・能力」⁽⁸⁾が明確に打ち出されてきたところである。

このような中、令和4年8月には中教審に「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設置され、幼保小の「架け橋プログラム」⁽⁹⁾の推進が提案された。このようなことから、幼児期の教育の成果が小学校教育につながることにより、子どもの発達と学びが連続することをねらいとした架け橋プログラムの開発が、全国的に推進されるようになった。

(2) 「教育行政執行方針」等について

白老町においては、『白老町教育大綱（令和3年）』に基づき、8か年に及ぶ『白老町学校教育基本計画』⁽¹⁰⁾を策定している。3つの目標のうち基本目標では、「地域に信頼され、地域とともにある学校づくり」を掲げ、その具体的な方策としてプランを作成し、現在に至っている。

白老町教育委員会は、プランに関連する内容について「令和5年度教育行政執行方針（令和5年6月）」⁽¹¹⁾（以下、「執行方針」と記述する。）の中で次のように述べている。

【表1】「令和5年度 教育行政執行方針」（令和5年6月）

学校教育の充実

次に「**地域に信頼され、地域とともにある学校づくり**」についてであります。

（中略）

地域とともに育つ学校づくりにつきましては、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）と地域学校協働活動のさらなる活性化を目指してまいります。

また、小中一貫教育や小中連携教育につきましては、「幼保小連携・接続プラン」に基づいたスタートカリキュラムによる継続的な取組や白老町教育研究会の充実を図ってまいります。

執行方針では一貫教育や連携教育等に関連して、プランに基づいたスタートカリキュラムによる継続的な取組と白老町教育研究会の充実を挙げている。一貫教育や連携教育等については小中間のみならず、幼児期の教育と小学校低学年教育における学校段階等間の円滑な接続の重要性に鑑み、執行方針の重点施策としてプランを策定したものである。

2. 「幼児学童教育連絡協議会」について

白老町における幼保小連携・接続の教育活動は、現在、白老町の小学校4校、幼稚園1園、保育園4園をもって構成されている「幼児学童教育連絡協議会」が中心となって取り組まれている。

会則では「幼児学童教育連絡協議会」（以下、「協議会」と記述する。）の活動は、昭和56年12月1日からスタートし、2回の一部改正を経て、現在に至っている。

本協議会の目的は、「白老町の幼児学童の一貫した教育の向上をはかること。」と記述されており、今日、求められている連携教育や一貫教育など学校段階等間の接続に関する考え方を昭和の時代から先進的に試行しているところに特色がある。

本協議会は白老町の小学校、幼稚園、保育園と連携を図り教育活動を展開してきた歴史的な経緯があることから、連携・接続に関する数多くの実践的な知見を有している。このように、教育委員会と本協議会は国の教育動向等を踏まえ、令和4年3月には、数多くの知見に基づきプランを策定しており、地域とともにある白老町の教育プランとして意義深いものがある。

3. 幼保小連携・接続の課題等について

本稿では「幼保小接続に関する課題」について、『架け橋プログラム』における接続の課題と「協議会が認識する接続の困難さ」の2点について述べる。

(1) 「架け橋プログラム」における接続の課題

文部科学省が推進する「架け橋プログラム」⁽¹²⁾では、全国的な幼保小接続の主な課題について、「園が行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない。」「『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』だけでは、具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善方法がわからない。」「小学校側の取組が、教育方法の改善に踏み込まず学校探検等にとどまるケースが多い。」等が述べられている。

幼保小の現状から、「交流の場を設ける」ことから資質・能力をつなぐ「カリキュラム開発」まで段階的に移行するためには、合同の指導計画の作成など、幼保小間をつなぐ計画的・組織的な教育課程の編成が必要不可欠である。しかし、上記のように幼保と小の学校種の違いからくるお互いの教育方法の理解が進まない状況が大きな課題となっている。

(2) 協議会が認識する「接続の困難さ」

白老町では、これまでに各幼保小による保育・授業参観や、生活科を中心とした年長期幼児と低学年児童との交流の場を設けるなど、連携・接続に関する教育活動を積み重ねてきた。本協議会ではこれまでの実践的な知見を踏まえ、幼保小の円滑な接続を目的としたカリキュラム編成等について、次のような課題をあげている⁽¹³⁾。

<幼保小接続の課題>

- ① 年長期幼児と低学年児童との交流の場を継続的に設けるカリキュラムの編成
- ② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとにしたスタートカリキュラムの編成
- ③ 子供に関する情報の共有の場の設定

協議会では「接続の困難さ」⁽¹⁴⁾について、次のように指摘している。

しかし、遊びや生活を通して総合的に学んでいく幼児期の教育課程と、各教科等の学

習内容を系統的に学ぶ児童期の教育課程は、内容や進め方が大きく異なり、小学校教育への接続は容易ではない。

教育方法や教育課程の違いを幼保小の教員間で理解し合い、合同のカリキュラム開発にまで「つなぐ」ためには、理解と納得に多くの時間と労力がかかり、ここに「情報や教員間の共有」と「教育課程をつなぐ！」ことの難しさがある。このような認識のもとでプランは、教育委員会と協議会等が中心となって作成されることになった。

IV 「白老町幼保小連携・接続プラン（令和4年3月）」について

前述の通り、本プランは幼児教育と小学校教育の円滑な連携・接続を意図して、令和4年3月に作成された。以下、本プランの考え方や具体的な内容等について述べる。

1. プランの趣旨とねらい ～ 「学びの連続性」と「連携・共有」

プランの「はじめに」には、次のように記述されている。

【表2】「はじめに」（プランより）

はじめに

幼児期の教育から小学校教育への接続の重要性については、平成22年11月に文部科学省より示された「小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」の中で幼保小接続の仕組みとして幼児と児童の交流活動や、教職員の交流、相互参観、合同研修を行うなど、双方の教育の理解を深める取組が進められてきました。

（中略）

白老町においても「幼児学童教育連絡協議会」の活動を中心に幼保小の連携、接続を進めてきましたが、この度、改めて幼児期から小学校までの子供たちの成長を見通し、基本的な考え方やスタートカリキュラムを作成し、生活や学びの連続性の確保と、円滑な連携・共有を図ることといたしました。

本プランは、幼児教育と小学校教育における教育内容や方法を、それぞれの発達段階を踏まえた教育活動の充実を図るものとして活用し、白老町の子供たちの学びの保障に努めます。

令和4年3月 白老町教育委員会

(1) 教育委員会の思いや願い ～ 保育現場から

改めて幼児期から小学校低学年までの子供たちの成長を見通し、プランでは「①生活や学びの連続性の確保」と「②円滑な連携・共有」が強調されている。

①の具現化については、「スタートカリキュラム」の編成・実施をあげており、白老町に

おける幼児期の教育と小学校教育（低学年）の接続に関する重点施策として提起されたものである。「スタートカリキュラム」への着目は、教育委員会の思いや願いがその背景にある。教育委員会の担当者は過去に公立保育園の勤務経験があり、私見として次のように述べている。

【表3】 担当者的話（私見）

私自身も感じていたことですが、年長児を学校へ送り出した後の授業参観で保育園にいた時に当たり前でできていたことがなぜかできなくなっているという「違和感」がありました。学校側の意見を聞くことがなかったのですが、聞いていく中で学校も保育園や幼稚園でどのような体験や学びをしているかわからないため、どこを焦点化するかわかりにくいということも聞こえてきました。

入学児童数も減少しており、学びや育ちがスムーズに引き継ぐことが重要ではないかと考え、幼児学童教育連絡協議会の活動としてできないかを事務局の校長に相談し、進めることとしたものです。

担当者的言葉には、保育園に勤務していた経験があるからこそその思いや願いを感じる。本プランの作成を通した教育委員会の取組は、幼保小連携・接続の組織化をリードする白老町教育委員会のリーダーシップの発揮と見ることができる。

(2) 「連携・共有」の具現化

②については「連携・共有」が校種間の違いに伴う運営（経営）上の配慮事項のキーワードとして記述されている。前述の通り、「交流活動」から資質・能力をつなぐ「カリキュラム開発」の段階まで移行するためには、交流活動を支える幼保小間をつなぐ組織的かつ計画的な経営上の取組が必要不可欠である。

幼保小連携・接続の取組についても、教育活動を支える人、もの、お金、情報等の「運営（経営）活動」の側面についても合わせて考えていくことが必要である。特に、人と情報に関する「連携・共有」は、連携・接続の推進に向けたマネジメントの要諦とも言えるものであり、改めて園・学校間をつなぐ教育委員会の支援が期待される。

2. 幼保小連携・接続における目標と考え方

プランには、幼保小連携・接続について3つの目標とスタートカリキュラムによるギャップの縮小・解消など、基本的な考え方が示されている。

(1) 連携・接続における目標

白老町では、教育推進基本理念⁽¹⁹⁾を、次のように示している。

<『白老町教育大綱（令和3年）』教育推進基本理念>

ともに学び合い ところをひびかせ 笑顔かがやく 教育の町 しらおい

基本理念については、幼保小連携・接続の観点から、「安心・自立・成長」と位置付け、全体目標、幼保の目標、小学校の目標の3つの目標を設定している。特に「全体目標」については、次のように円滑な接続に向けた交流活動や「接続期」に関する目標を設定している。

- ① 子どもや教職員同士の交流の機会を設定し、相互の連携を図ること。
- ② 「教育・保育において育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて、学びの連続性を意図した「接続期」の教育課程を編成すること。

教育課程の編成には、原則、目標、内容、方法の3要素を踏まえることが求められるが、幼保小連携・接続のカリキュラム開発には異校種間で共有する目標を明確に設定することが必要である。本プランでは、幼保及び小学校の目標のみならず、異校種間等の接続において共有すべき目標を「全体目標」として位置付けているところに特色がある。「接続期」における目標設定は、学びの連続性をねらいとした教育課程の評価・改善の際に必要な不可欠なものであり、保育・指導と評価の一体化を目指したカリキュラム開発が求められる。

3. 「子どもの姿」の評価への試みについて ～ スタートカリキュラムの評価

本プランでは、幼児期（学びの芽生え）と児童期（自覚的な学び）の「学びの視点」を踏まえ、「スタートカリキュラムによるギャップの縮小・解消」を目指した取組が提案されている。スタートカリキュラムの評価については、【表4】のような内容等で進められている。

(1) 「幼・保・小 引継ぎシート」について

白老町は教育推進基本理念をもとに、幼保小連携・接続の観点から「安心・自立・成長」を具体像として位置付け取り組んでいる。【表5】にあるように3つの「自立」に着目し、幼稚園・保育園の子どもの姿を評価するために「評価規準」の開発を試みている。

具体的には、接続期（幼児期年長クラス卒園時・学童期小学校1年生）の子どもの姿について「3つの自立」の度合いを文章化し、評価指標としている。また、文章化する際には、①～⑩の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえ、日々の保育から評価した子どもの姿と育みたい資質・能力との関連を図り表記している。文末表現については、日常の保育の評価や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等を参考に、「…興味・関心をもって。」「…諦めずに、やり遂げている。」等と共通様式により表記しているところに特色がある。

【表5】は幼稚園、保育園の担任が作成することになっている。学び、生活上、精神的の各自立の度合いについて、学級担任が卒園時の幼児の姿を3段階で評価し記述する。記述欄については、評価が「△気になる」の子ども等について必要に応じて記述することになっている。

(2) 「到達・評価規準」について

【表6】は前述の「幼・保・小 引継ぎシート」をもとに、接続期における学童期小学校1年生における1学期5月末までの子どもの姿を『ゴール』と考え「到達・評価規準」を設

【表4】「スタートカリキュラム」の評価

＜作成のねらい＞

小学校に入学した子供が、幼児期の遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくために作成する。

その実現を目指すために学びを豊かにするスタートカリキュラムの編成と実施、評価を行い改善の方策を明確にする。

＜スタートカリキュラムの評価内容・手順等＞

- ① 幼稚園及び保育園の要録や「幼・保・小 引継ぎシート」(【表5】)、その他の情報提供等から、幼児の成長の様子を小学校に伝える。
 - ◇ 卒園児の幼児期年長クラスの姿について、「3つの自立」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に合わせた評価規準を作成し、「幼・保・小 引継ぎシート」としてまとめる。
 - ◇ 「幼・保・小 引継ぎシート」は、幼保の教員が3月中に評価を行い、記述したシートを3月末に小学校へ情報提供する。
- ② 1年生の学級担任は「幼・保・小 引継ぎシート」をもとに、スタートカリキュラムに1学期の5月末までに育ってほしい児童の姿を「3つの自立」に着目して、到達・評価規準として『ゴール』(【表6】)を作成する。
 - ◇ 各小学校は前年度に作成したスタートカリキュラムをもとに、当該年度のカリキュラムを作成する。
 - ◇ 各小学校のスタートカリキュラムには、週ごとに「この週で特に意識したい『ゴール』」が位置付けられ、評価を行う。
- ③ 入学から5月末までの評価について、『ゴール』に到達しているかどうか、「到達・評価規準」により小学校1年生の児童の姿を評価する。
- ④ ③の評価に基づいて、スタートカリキュラムの改善の方策を明確にし、カリキュラムの改善・充実を図る。
 - ◇ 幼児期の体験をきっかけとして、各教科等の時間割編成につなげる。
(例) 表現力を養うために、国語と図工を連続して時間割に組み込む。
 - ◇ 『ゴール』を生かした学習活動を構成する。
 - ◇ 『ゴール』を意識し、生活上必要な習慣や技能が身に付くように指導する。
(例) 決まりやマナーの確認、学校生活のリズムづくり

定して評価を試みようとするものである。

学童期小学校1年生については、卒園時の幼児の状況が入学後の児童の学習や生活にどのようにつながるのかを考慮して「1学期5月末までの児童の姿を『ゴール』とした「到達・評価規準」を作成している。「到達・評価規準」については、「幼・保・小 引継ぎシート」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、生活科における「評価規準」を参考に、引継ぎシートと同様に「…活動している。」「…関わっている。」等と表記している。

【表5】 共通様式 「幼・保・小 引継ぎシート」

5 共通様式

幼稚園・保育園の担任が作成

<幼・保・小 引継ぎシート> 園児氏名 _____

園 名		記 録 者	
-----	--	-------	--

【評価記入】 ○…大変良い 空欄…普通 △…気になる * 記述欄は必要に応じて

	内 容	姿	評価	記述欄
学 び の 自 立	自分の経験したことや感じたこと、考えたことなどを相手に分かるように話している。	⑨		
	相手の話を注意して聞き、理解している。	⑨		
	ある程度ひらがなを読んだり、名前や知っている言葉を書いたりできている。	⑧		
	思ったことや感じたことを絵や言葉などで表現している。	⑩		
	生活や遊びの中で、数や図形に興味・関心をもっている。	⑧		
	自然と触れ合い、その変化や様々な事柄に興味・関心をもっている。	⑦		
	自分でしなければいけないことが分かり、諦めずにやり遂げている。	②		
	いろいろな遊びを通して、確かめたり工夫したりして、友達と楽しんで活動している。	⑥		
生 活 上 の 自 立	戸外でしっかり体を動かしている。	①		
	安全に気を付け、きまりを守って生活している。	④		
	落ち着いて食べる、友達の嫌なことほしくないなどマナーを意識している。	④		
	準備や後始末など生活に必要な活動を自ら行っている。	②		
	みんなのために進んで仕事をしたり、みんなを使うものを大切にしたりしている。	⑤		
	先生や友達、地域の人などに親しみの気持ちをもって挨拶している。	⑤		
精 神 的 な 自 立	生活の中で見通しをもって行動し、充実感を感じている。	①		
	自分の考えや思いを言葉にして伝え合おうとしている。	⑨		
	みんなで立てた目標に向かって、進んで取り組んでいる。	③		

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

- ①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり ⑥思考の芽生え
⑦自然との関わり、生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現
その他(家庭・生育状況、兄弟関係、食物アレルギー等配慮事項など)

--

【表6】 接続期における「三つ自立」「幼児期の終わりまで育てほしい姿」に合わせた到達・評価規準
6) 接続期における「三つの自立」「幼児期の終わりまで育てほしい姿」に合わせた到達・評価規準

幼児期年長クラス 卒園時	自立	学童期小学校1年生 1学期5月末
<input type="checkbox"/> 自分の経験したことや感じたこと、考えたことなどを相手に分かるように話している。⑦ <input type="checkbox"/> 相手の話を注意して聞き、理解している。⑨ <input type="checkbox"/> ある程度ひらがなを読んだり、名前や知っている言葉を書いたりできている。⑧ <input type="checkbox"/> 思ったことや感じたことを絵や言葉などで表現している。⑩ <input type="checkbox"/> 生活や遊びの中で、数や図形に興味・関心をもっている。⑧ <input type="checkbox"/> 自然と触れ合い、その変化や様々な事柄に興味・関心をもっている。⑦ <input type="checkbox"/> 自分でしなければいけないことが分かり、諦めずにやり遂げている。② <input type="checkbox"/> いろいろな遊びを通して、確かめたり工夫したりして、友達と楽しんで活動している。⑤	<input type="checkbox"/> 戸外でしゃかり体を動かしている。① <input type="checkbox"/> 安全に気を付け、きまりを守って生活している。④ <input type="checkbox"/> 落ち着いて食べる、友達の嫌なことはしないなどマナーを意識している。④ <input type="checkbox"/> 準備や後始末など生活に必要な活動を自ら行っている。② <input type="checkbox"/> みんなのために進んで仕事をしたり、みんなが使えうものを大切にしたりしている。⑤ <input type="checkbox"/> 先生や友達、地域の人などに親しみの気持ちをもって挨拶している。⑤	<input type="checkbox"/> 目的や相手の状況などに応じて、自分の伝えたいことを相手に分かるように話している。 <input type="checkbox"/> 先生や友達の話などを最後まで集中して聞き、理解している。 <input type="checkbox"/> 文字を正しく読み書きし、生活や学習の中で使おうとしている。 <input type="checkbox"/> 日記や探検の振り返りなど、学校生活や学習の中で、自信をもって考えを表現している。 <input type="checkbox"/> 数の合成・分解、並ぶ順番や位置、形の違いが分かっている。 <input type="checkbox"/> 植物の栽培や自然の中での活動を通して、自然の事物や現象に関心をもって自分から関わり調べている。 <input type="checkbox"/> 学習や活動での課題を前向きにとらえて、最後まで行っている。
<input type="checkbox"/> 生活の中で見通しをもって行動し、充実感を感じている。① <input type="checkbox"/> 自分の考えや思いを言葉にして伝え合おうとしている。⑨ <input type="checkbox"/> みんなで立てた目標に向かって、進んで取り組んでいる。③	生活上の自立	<input type="checkbox"/> いろいろな学習や遊びを通して、友達の考えを聞いたり自分の考えを伝えたりしながら活動している。 <input type="checkbox"/> 遊具や中庭など外で体を動かしている。 <input type="checkbox"/> 時間やきまり、マナーを意識して、生き生きと学校生活を送っている。 <input type="checkbox"/> 机上準備・整理、使った用具の整頓を自分でしている。 <input type="checkbox"/> 当番や係の仕事を進んでしたり、学校のことを大切に使用している。 <input type="checkbox"/> 先生や友達、上級生、地域の人に進んで挨拶している。
精神的な自立	<input type="checkbox"/> 学校生活の1日の流れが分かり、見通しをもって安心して過ごしている。 <input type="checkbox"/> 自分の思いを伝えたり友達の考えを聞いたりしながら、友達とうまく関わっている。 <input type="checkbox"/> 活動や学習の目標を大切に、友達と協力して取り組んでいる。	

【幼児期の終わりまで育てほしい姿】
 ①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり ⑥思考力の芽生え
 ⑦自然との関わり、生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現

(3) スタートカリキュラムの事例

【表7】は、白老町立虎杖小学校における「虎杖小スタートカリキュラム」である。

週ごとに作成されていることから、3つの自立ごとに「この週で意識したい『ゴール』」として、「到達・評価規準」から2～3つ選択し設定されている。また、「この週で意識した

【表7】 白老町立虎杖小学校のスタートカリキュラム

虎杖小スタートカリキュラム

【1日目～5日目】

この週で特に意識したい『ゴール』

学びの自立	<input type="checkbox"/> 先生や友達の話などを最後まで集中して聞き、理解している。 <input type="checkbox"/> 学習や活動での課題を前向きにとらえて、最後まで行っている。
生活上の自立	<input type="checkbox"/> 遊具や中庭などで体を動かしている。 <input type="checkbox"/> 時間やさまり、マナーを意識して、生き生きと学校生活を送っている。 <input type="checkbox"/> 机上準備・整理、使った用具の整備を自分でしている。
精神的な自立	<input type="checkbox"/> 学校生活の1日の流れが分かり、見通しをもって安心して過ごしている。 <input type="checkbox"/> 自分の思いを伝えたり友達の考えを聞いたりしながら、友達とうまく関わっている。

【時間割】 実施教科とゴールを意識した指標を明記

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
朝	・学習準備が自分でできる。		・身の回りの整理整頓が自分でできる。		
	・トイレを自分で決まった時間に済ませられる。		・提出物の提出が自分でできる。		
1		学活 1年生になって 先生の話最後まで 集中して聞く。	国語 いいてんき 絵を見て話したり応 答したりする。	国語 おなはしたのしいな 読み聞かせを聞いて、内 容や感想を伝え合う。	音楽 うたやおんがくにあわせて 友達と一緒に歌ったり、音 楽に合わせて体を動かした りする。
2	行事 入学式 大きな声で返事がで きる。	行事 二計測・視力検査 先生の話最後まで集中し て聞いて、行動ができる。	生活 せいこつかがはじまるよ 小学校生活と入学前を比べ たり、気付いたことを話し たりする。	生活 がっこうのはじまり 自己紹介や友達作り の活動を楽しむ。	生活 がっこうの1にち 学校での生活リズムに 気付き、学校への期待や 楽しみをもつ。
3	行事 入学式 儀式に臨む態度がで きている。	生活 せいこつかがはじまるよ 学習や活動に前向きに 捉えて興味をもつ。	国語 いいてんき 絵を見て話したり応 答したりする。	学活 がっこうのきまり 時間やさまりを意識し て、学校生活を送ろうと している。	国語 おなはしたのしいな 読み聞かせを聞いて、内 容や感想を伝え合う。
4		学活 きゅうしよくをたのしくたべよう 給食時のさまりや準備 のしかたがわかる。	道徳 がっこうだいすき 学校でどんなことを楽 しみにしているかを伝 え合う。	国語 おなはしたのしいな 読み聞かせを聞いて、内 容や感想を伝え合う。	体育 体づくりうんどう 体を動かす楽しさや気 持ちよさを味わう。
5					
下校	11:30	13:10	13:10	13:10	13:10

『ゴール』を意識した指導事項や環境整備

- 朝の過ごし方のルールづくり 整理整頓のしかたの確認 声のものさしづくり 休み時間後の過ごし方の確認
トイレのタイミングの確認 時間を意識した給食時間の場づくり あいざつ、返事、しまいかたの徹底
 ⇒子供と寄り添いながら、ルールや方法を確認し、自分で判断できる雰囲気をつくっていく。

い『ゴール』』の評価を受けて、「『ゴール』を意識した指導事項や環境整備」には、評価結果から改善へ向けた方策について表記されている。

V 考 察

1 連携・接続の組織化を支援する教育委員会等の役割について

本稿ではプランのねらいや内容等について述べてきたが、その推進に向けた中核的な役割を担っているのが白老町教育委員会と「幼児学童教育連絡協議会」である。

(1) 教育委員会の役割について ～ ビジョンの立案と共有化

本プランは「執行方針（令和5年6月）」に基づく教育ビジョンの具体化として、協議会と連名で作成されたものである。教育委員会には次のように2つの主な役割が期待される。

- ① 園・学校や保護者、地域住民等の実態把握や推進に向けた関係機関等との連絡・調整を行う役割 **【連絡・調整機能】**
- ② 地域に教育ビジョンを示し、教育活動等の組織化をリードし支援する役割

【政策立案・実施・推進機能】

特に本プランでは②に関連して、教育委員会は町内の幼稚園、保育園、小学校がブロック単位でネットワークを形成し、「幼児学童教育連絡協議会」と一体となって「教育ビジョン」を白老町の園・学校や保護者、地域住民等に明示している。さらに、異校種間の教職員がともに連携・協働できるよう教育ビジョンの具体化と共通理解を図るためにスタートカリキュラムの編成・実施を通して具体的に何を、どのように実行すべきかを明らかにしている。すなわち、教育委員会の「教育ビジョン」をプランの内容・方法をもって園・学校の教職員に説明し、連携・接続に向けた「ビジョンの共有化（共有ビジョンの形成）」を図ろうとしたものと言える。ここに幼保小連携・接続の組織化をリードし支援する教育委員会の姿を垣間見ることができる。

(2) 「幼児学童教育連絡協議会」の役割について ～ 双方向の情報共有と橋渡しの役割

前述の通り、教育委員会が本プランの立案に当たっているが、企画・立案からプランの実施までの具体的な作業プロセスにおいては、協議会が大きな役割を果たしている。本協議会は、町内の幼稚園、保育園、小学校がブロック単位で連携・協働し、それまでの実践的な知見をもとにプランの具体的な内容・方法等についてまとめてきた。特に教育ビジョンの具現化を図るためにスタートカリキュラムの編成・実施に向けて、「異校種間で何をどのように共有すべきなのか?」「どんな手順でいつまでに実行するのか?」など、教職員間の合意形成やビジョンの共有、さらには引継ぎシートや連携タイムスケジュール等の共通様式の開発など、具体的な方策の立案・実行に取り組んでいる。

教育委員会は、ビジョンの方向性や方針の明確化を意識しながら、スモールステップに内

容等を伝えていく必要がある。一方、幼保小には具体的な実践を任せて、連携・接続に関する教育活動の創意工夫を引き出し、教職員や連携組織としての自律性を高めていくことが求められる。これまでの聞き取り調査や関係資料からは、協議会は諸会議や保育・授業参観、合同研修等を通して教育委員会と幼保小間が情報を確認し合い、双方向の情報共有を図るための橋渡しとしての役割を担っていることが伺えた。橋渡しの機能を有する協議会は、連携・接続の推進に向けた教育委員会と幼保小の実践をつなぐ中間組織として重要な役割を果たしている。

2. 異校種間の子どもの姿の評価への試みについて

幼保小連携・接続の推進については、指導観や評価観の違いをどのように乗り越え、カリキュラム開発や継続的・組織的な教育活動やその評価につなげていくかが大きな課題である。

(1) 「保育における評価」 ～ 『保育・指導と評価の一体化』

連携・接続の取組を推進していく場合、幼児期の教育と小学校教育による指導観や評価観の違いのある中でどのように子どもの姿を見取り、評価を共有していくかが問題となる。

文部科学省⁽¹⁵⁾は、保育における評価の考え方について、「指導の改善」と「評価と評定の違い」について、次のように述べている。

- ① 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。
- ② 他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度について評定によって捉えるものではないこと。

保育における評価の本質は、幼児一人一人のよさや可能性の把握と評価結果を保育者の指導の改善に生かすことである。幼児一人一人のよさや可能性を把握する「個人内評価」を重視する幼児期の教育と小学校における「観点別学習状況の評価の総括」、「評定」には、指導観や評価観を背景とした方法論が異なっている。しかし、幼保小間における「保育・指導と評価の一体化」という視点では、評価の考え方を共有できるものとする。本プランでは【表6】のようにスタートカリキュラムの編成・実施と子どもの姿からその保育・教育効果を問うために、試行的に「到達・評価規準」等の評価指標を開発しているところに特色がある。

(2) 「到達・評価規準」と『ゴール』の設定

本プランでは3つの「自立」に着目し、スタートカリキュラムの評価に向けて【表6】のように「評価規準」の開発を試みている。

具体的には、接続期（幼児期年長クラス卒園時・学童期小学校1年生）の子どもの姿について、「3つの自立」の度合いを一つの評価指標としてとらえ、卒園時の幼児の姿から小学校1学期5月末までの児童の姿の変容を評価しようとするものである。幼保小の各教員が

「3つの自立」を基本として、具体的な子どもの姿を「評価規準」として文章化し可視化を図ることにより、幼保小間の「評価の共有」を可能にしようと試みたものである。

幼保小間で「到達・評価規準」を設定し、小学校1年生の「自立」の度合いを試行的に評価していくことは、資質・能力の育成を目指した教育活動を評価し共有できる指標として価値ある試みであると考ええる。また、「到達・評価規準」を作成する過程は、幼保小の教員同士が「卒園児」と「1学期5月末（ゴール）」における子ども（児童）の姿やイメージを共有する機会にもなり得る。今後、合同研修の企画・立案など意図的・計画的な研究・研修活動の組織化を図ることも可能であり、研修による振り返りは、教職員一人一人の内発的改善意欲の醸成にもつながっていくものと考ええる。

IV ま と め

本研究では、地方の自治体が幼保小の連携・接続の取組を推進する場合の一つの事例として「白老町幼保小連携・接続プラン」を取り上げ、その趣旨やねらい、内容・方法等の特色について述べてきた。

以下、成果と今後の課題について述べる。

1. 成果について

1点目は、教育委員会における「ビジョンの共有化」と「教育活動の組織化への支援」である。教育委員会はプランの企画・立案と実践に向けた幼保小間のビジョンの共有化（共有ビジョンの形成）を図っている。また、協議会は本プランの企画・立案からプランの実施までの具体的な作業プロセスにおいて、教育委員会と幼保小の中間に介在し、双方の情報共有と実践の具体化を図る橋渡しの役割を担っている。教育委員会はビジョンの共有化に向けて、連携・接続の組織化をリードし、組織間のネットワーク形成を通してビジョンの浸透を図り、幼保小への支援を効率的かつ効果的に推進していることが明らかになった。

2点目は、試行的な評価指標の開発である。本プランの具現化に向けては、試行的にスタートカリキュラムにおける「到達・評価規準」を提示している。指導観や評価観に違いがある幼保小間において、連携・接続のカリキュラム開発と実践・評価は難しい課題でもある。このような中、本事例ではスタートカリキュラムの編成に関わって「幼児期の終わりまで育ててほしい姿」と関連付け、小学校1年生の「自立」の度合いを評価するために「到達・評価規準」を開発し評価を試みようとしている。今後、さらなる検証等を積み重ねることによって、幼保小間の教員同士が子どもの姿の変容を共有し、「接続期」におけるカリキュラム開発や評価の改善・充実につながっていくものと考ええる。困難な評価指標の開発に敢えて取り組まれた教育委員会や協議会等の関係職員の意欲と努力に敬意を表するものである。

3点目は、連携・接続に関する「協働」のマネジメントである。異校種間における連携・接続の推進については、個々の園・学校レベルと園・学校間の校種を超えた組織同士のレベルの教育活動を考えていく必要がある。その際、組織間の教育活動については「協働」の認識と実行に向けたマネジメントが求められる。本事例では、教育委員会や協議会等の活動から、「方向性・ビジョンや目的・目標の共有」、「役割分担の明確化」、「橋渡しとしての協議会の役割」等の知見を得ることができた。

2. 今後の課題について

上記の成果を踏まえ、今後の課題について述べる。

1点目は、協議会とブロックの連携と橋渡しの機能の明確化である。前述の通り、プランの企画・立案から実施までの具体的な作業プロセスにおいて、協議会等は教育委員会と幼保小の中間に介在し、双方の情報共有を図る橋渡しの機能を有していることが明らかになった。しかし、本研究では地区ブロックの活動と役割、協議会と地区ブロックの連携等については、具体的な知見を得ることができなかった。教育委員会がリーダーシップを発揮し、園・学校レベルで実効性のある教育活動を展開するためには、組織体制の中間に位置付く地区ブロックの役割等を明確にしていくことが必要である。

2点目は、異校種間における子どもの姿の評価の在り方である。前述の通り、「到達・評価規準」の試行的な開発は、幼保小間の教員同士が子どもの姿の変容について語り合うことを可能にするものであり、「保育における評価」や「生活科の学習評価」を考える機会として重要な提案であると考えられる。

今回は紙幅の関係で「評価規準」の分析・考察までには至らなかった。生活科の学習評価に関する参考資料⁽⁴⁸⁾には、評価規準を作成する際に参考にできる「育成を目指す資質・能力を踏まえた評価規準の作成のポイント」が記載されている。幼児期の教育と小学校教育の接続においては、幼保小間で共有できる「知識及び技能の基礎」や「思考力、判断力、表現力等の基礎」など、育みたい資質・能力に着目した「評価規準」の開発が必要である。異校種である幼保小間において「評価規準」の開発にはどのような要件が必要なのか、共有できる評価として機能する「到達・評価規準」の開発等について、さらに深掘りして考えていくことが求められる。今後、評価規準の文章表現や評価方法、異校種間における評価システムの構築、評価の客観性や信頼性の問題など、さらなる実践の積み重ねを通じた検証・改善が必要である。

謝 辞

本調査・研究については、白老町における幼保小連携・接続の取組に関する聞き取り調査や資料収集に当たり、白老町教育委員会をはじめ、白老町立虎杖小学校校長 関東英政様、教頭 寺沢圭司様、関係職員の皆様には多大なるご協力とご指導をいただきました。改めて御礼申し上げます。また、白老町立白老中学校校長 前田道弘様には、数多くのご助言をいただきました。

た。感謝申し上げます。本研究報告は、今後の研究に大きく役立つものとなりました。記して心から深謝申し上げます。

注 釈

本稿における「連携」及び「接続」については、酒井・横井の考え方にに基づき述べていく。

「連携」とは、相互に異なるセッション同士が協力して何かに取り組むことを意味する。幼児教育と小学校教育の接続を実現するために、保育所、幼稚園と小学校が相互に協力することである。

「接続」とは、下の学校種と上の学校種との間をつないで、円滑な移行を達成する営みである。幼児教育（保育所、幼稚園）と小学校教育とをつなぎ、円滑な移行を達成することである。

※ 酒井朗，横井紘子（2011）「双書 新しい保育の創造 幼保小連携の原理と実践－移行期の子どもへの支援－」ミネルヴァ書房 p66-67より

主な引用及び参考文献

- 1) 倉橋惣三，幼稚園から小学校へ－幼稚園と小学校幼年級の眞の聯結－，幼児教育第23巻4号，日本幼稚園協会（1923） p133-139
- 2) 文部科学省 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」平成22年11月
- 3) 文部科学省「幼稚園教育要領（平成29年告示）」フレーベル館
- 4) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成24年告示）」東洋館出版
- 5) 中央教育審議会初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 審議経過報告」令和4年3月
- 6) 白老町教育委員会・白老町幼児学童教育連絡協議会「白老町幼保小連携・接続プラン」令和4年3月
- 7) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」平成30年3月 フレーベル館 p50-73
- 8) 同上 p52-73
- 9) 中央教育審議会初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 審議経過報告」令和4年3月
- 10) 白老町教育委員会「白老町学校教育基本計画（令和3年度～令和10年度）～自らの可能性を拓き，新たな社会を生きる子どもを育成します～」令和3年4月
- 11) 白老町教育委員会「令和5年度 教育行政執行方針」令和5年6月
- 12) 中央教育審議会初等中等教育分科会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会 審議経過報告」令和4年3月 「幼保小の架け橋プログラム指導に向けての手引き（初版）」 p10
- 13) 白老町教育委員会・白老町幼児学童教育連絡協議会「白老町幼保小連携・接続プラン」令

- 和4年3月「幼保小接続の現状と課題」 p2
- 14) 同上「幼保小接続の現状と課題」 p2
 - 15) 文部科学省「幼児理解に基づいた評価」平成31年3月 チャイルド本社 p10
 - 16) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2018）『『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【小学校 生活】』 東洋館出版 p10
 - 17) 文部科学省・国立教育政策研究所教育課程研究センター（2018）「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム スタートカリキュラム導入・実践の手引き」 学事出版 p10
 - 18) 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編」平成29年7月 東洋館出版
 - 19) 一前春子，秋田喜代美，天野美和子（2021）「マルチステークホルダーの視座からみる保幼小連携接続－その効果と研修のあり方－」 風間書房
 - 20) 湯川秀樹，山下文一（2023）「幼児期の教育と小学校教育をつなぐ幼保小の『架け橋プログラム』実践のためのガイド」 ミネルヴァ書房 p133－139